

## 実践 1

日常の経験と表現を結びつけ、  
イメージを膨らませるための課題との出会い  
第6学年 図工 題材名「オリジナルドリンクをプロデュースしよう」

本時のねらいは「色の面白さや美しさを感じる」ことである。本実践では、6年生の児童が、日常的に色を感じる場面の1つでもある「飲料水を選ぶ場面」を導入に設定することで、児童の潜在的な色彩経験と表現活動を結びつけようとした。また、その中に絵の具でつくった偽物の飲料水を紛れ込ませ、それを見抜くというクイズ形式の課題を用意することで、普段見ている以上に、意識的に色のよさや美しさに着目し、本時のねらいにせまることができると考えた。同時に、自分も絵の具でドリンクを表現できるということに気付かせることにもつながった。

もう1つのねらいは、「企画書を書いたり、色水をつくったりすることを楽しみながら、つくりたいオリジナルドリンクのイメージを膨らませる」ことである。ドリンクづくりの企画書を用意したが、企画書を書くことがねらいではない。色水をつくること（創造的思考）と企画書を書くこと（論理的思考）を、行き来する試行錯誤のプロセスを十分保証することで、「自分ならこんなドリンクをつくる」というイメージを膨らませることができるようにした。

本実践では、この「導入の仕掛け」の工夫と「思考の行き来」の時間を保証することで、児童一人一人が自分のつくりたいドリンクのイメージを深め、膨らませることができた。

## 実践 2

個々の児童の経験や体験を共有するための教材の工夫  
第1学年 算数 単元名「かたちあそび」

本時のねらいは「箱などの身の回りの具体物の概形をとらえ、立体図形の特徴や機能を知る」ことである。本実践では、個々の経験や体験を焦点化し互いに共有していくことができるよう、各グループに、あえて同じ箱を同じ数だけ用意し、「できるだけ高いタワーをつくろう」という共通の課題を設定した。それぞれの児童の既存経験（積み木遊びなどの日常的な経験）を基にして「箱を高く積むための工夫」を共有していくことで、本時のねらいにせまることができると考えた。

本実践では、児童一人一人が自分の考えをもつことができるように、活動の時間を多く取るようにした。また学んだことを生かすことができるよう、活動の時間を2回に分けた。1回目の活動では、既存経験を基にして自分なりに考え、箱を高く積み上げるという課題解決のために試行錯誤を重ねる時間とした。その後、全体で工夫したことを話し合い、2回目の活動では、再度、話し合いから学んだことを生かして（ロジカルな思考を含む）箱を高く積み上げていく時間をとった。実践では、どのグループも学んだことを生かして、1回目よりも高いタワーを作ることができた。

## 実践 3

## 児童の既習体験を想起させる発問の質

## 第4学年 理科 単元名「とじこめた空気と水」

本時のねらいは「閉じ込められた空気がおし縮められて、もとに戻ろうとする力で玉が飛ぶことを理解する」ことである。本実践は、前時に空気でっぽうで玉を飛ばす体験をした際に児童から出た「なぜ玉が2個ないと飛ばないのだろう」という疑問から、玉が飛ぶ時の筒の中の空気に注目し、課題を設定した。グループでの実験で共通体験をし、実験から分かったことを話し合い、考えを共有することで本時のねらいにせまることができると考えた。

本実践では、前時での体験を想起させる「どうして前玉が飛ぶのだろうか。」という発問から始めた。まず、一人一人が発問に対する自分の考えをもつ時間をとった。なぜそのように考えたのかという理由も添えることで、自分の考えをより明確にした。次に、グループで自分の考えを伝え合う活動を行った。友達の考えと自分の考えを比較することで、自分が思いつかなかった考え方を発見したり、出会ったり、もう一度自分の考えについて振り返ったりすることができた。その後、実験を行い、結果についてグループごとに考察したことを学級全体で話し合った。明確な課題意識が、予想・実験・検証・まとめまで持続し、論理的に考えることができた。

## 実践 4

## 相手や目的に応じて情報を分類・整理するための発問の質

## 第6学年 総合的な学習の時間 単元名「館山博士になろう」

本時のねらいは「館山の魅力を伝えるために必要な情報は何かを話し合い、発表内容を考える」ことである。児童は移動教室での経験や学校の伝統を受け継ぐという思いから、5年生に館山の魅力を伝えたいという相手意識・目的意識をもち、単元テーマを設定した。本時では、5年生に館山の魅力を伝えるために必要な情報を絞り込むという課題を自ら設定し、課題解決を目指した。本時の実践では、館山での既有経験や活動で得た情報を基にして、論理的に考えるための方法を伝え、考える視点が明確になる発問を工夫した。

まず、必要な情報を整理するためには、付箋を活用した話し合いが有効であることを児童に伝えた。各グループでは、積極的に付箋を活用し、たくさんの情報の中から相手意識・目的意識に合ったものを選び出し、キーワード化して書き出した。キーワード化された付箋を使って、次に、話し合いでは、「最も伝えたいことは何か」と発問をした。この発問によって考える視点が明確になり、論理的な思考を促すことにつながった。考える視点に沿って付箋を活用したことで、どのグループも相手や目的に応じた必要な情報を絞り込むことができていた。本実践を通して、情報を分類・整理するという論理的に考える力が伸びた。